太宰府の文化財 301

梅と太宰府
～太宰府市民遺産の取り組み～

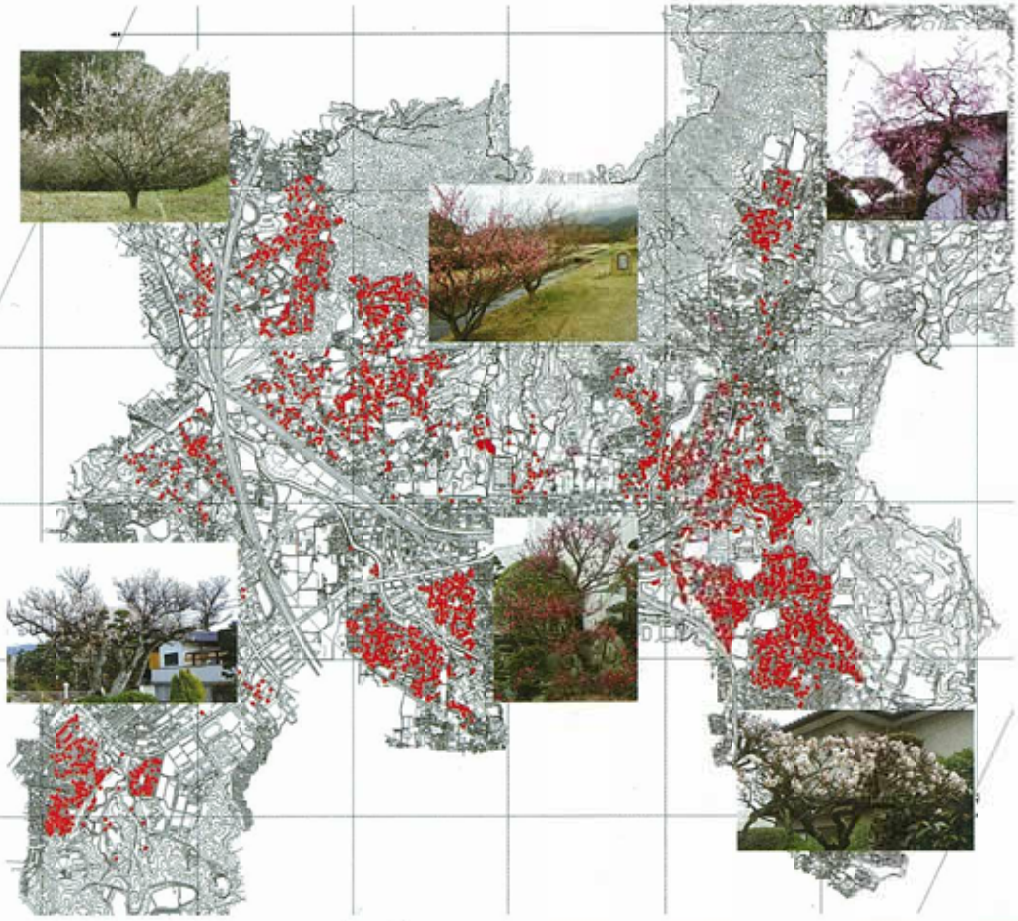
健康のためと朝に夕に散歩をしている皆さんも多いのではないでしょうか。その時々に、綺麗な花、景色、川の中の魚たちに、風情や郷愁を感じ、「このまま残ってくれたらいいのにな」という思いを抱かれたこともあるのではないかと思います。

太宰府といえば「梅」、市の花にもなっていますが、市内にどれくらいの梅が植えられているのでしょうか。今春、文化遺産調査ボランティアの皆さんの協力で調査しました。未調査箇所もありますが、市内各所に梅が植えられていることが分ってきています。調査の中で、昭和40年代に造成された団地では、家を建てる際「太宰府なので梅を植えませんか」と薦められたという記憶も明らかになってきました。奈良時代の大伴旅人が催した「梅花の宴」、菅原道真にまつわる飛び梅伝説など、太宰府と梅の強い結びつきは多くの記録に残されています。梅を植え、愛でること、これは遠い奈良時代から現代まで続いており、文化遺産調査ボランティアの皆さんの協力で明らかになってきた貴重な成果の一つと言えます。このように考えると、梅を植え育てていくことは、市民遺産候補の一つになります。その時の活動者は、市民の皆さん一人ひとりかもしれません。

市では、市民が将来に残し伝えていきたい「モノ」やそれらをつなぐ物語を拾い集める取り組みを行っています。それは、これまでのように一部の人の価値観で拾い集めるのではなく、多くの人々、ここでは市民の皆さんの多様な価値観で拾い上げることを主眼に据えています。また、平成17年から「市民遺産」を標榜し、その取り組みを進めてきました。市民遺産は、できるだけ多くの皆さんに、その大切さが共有され皆が認めるものになること。そしてその保護育成に動き出すために、大切だと主張した人々の活動とともに、皆で知恵を絞り出し議論し行動する取り組みです。

今月下旬から市民遺産候補として、文化ふれあい館で「市民遺産展」を開催します（詳細は28頁）。今回は、関係部署による展示とは別に、文化遺産調査ボランティアの皆さんに考えていただいた「モノ」も展示します。その内容は多岐にわたり、一部の人間で考え調べたのでは到底及ばなかった「モノ」もあります。大切なのは、多くの目で見、多くの感性で受けとめることが、「今を記録する」ためには必要なのではないでしょうか。

文化財課　中島恒次郎



▶市内におけるウメ植樹箇所：●印　提供：㈶古都太宰府保存協会【文化遺産調査ボランティア】

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　✉keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

この広報紙は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 302

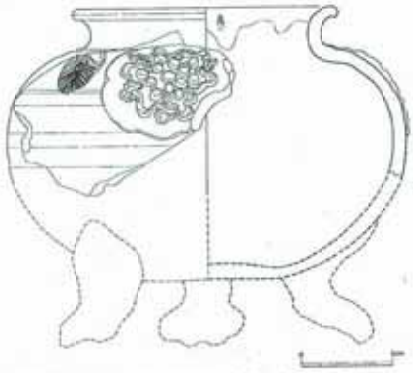
唐三彩

観世音寺出土　奈良～平安時代初頭

縄文時代以降、土器といえば素焼きという時代が長く続いていましたが、7世紀後半（飛鳥時代）になると、釉薬をかけた製品や技術が大陸・朝鮮半島から日本に伝わり、すぐに飛鳥地域では生産が始められました。銅成分も含まれることで緑～青味に発色するその色は「瑠璃色」と呼ばれ、天皇の住まう宮殿や都の大寺院でしか見ることができない、大変貴重なものでした。

ちょうど同じころ、中国（唐）では、緑色に加え、白色・褐色また藍色を交えたカラフルな色彩を持つ焼き物、「唐三彩」が作られるようになります。この焼き物は釉薬に鉛を含むため食器にできず、もっぱら墓への副葬品として皇帝から王侯貴族へ位に応じて下賜されていましたが、一部実用品も作られるようになり外国へも運ばれました。中国東北部の渤海国、朝鮮半島の新羅国、そして日本に伝わったことが知られています。

日本での出土品は、7世紀末から9世紀初頭にかけて、わずかに50例ほどが知られています。その多くが陶枕（まくら）ですが、都が置かれた近畿地方とここ福岡県下では、陶枕以外にも、花瓶・壺・椀・杯・盤・鉢などが見つかっています。これらは主に祭祀跡・寺院から出土するため、祭祀具・仏具として利用されることが多かったと考えられていますが、都の貴族の邸宅からの出土例もあるため奢侈品としても保有されたのでしょう。希少品がゆえに、遺跡の性格・歴史を物語るものとしても注目されます。

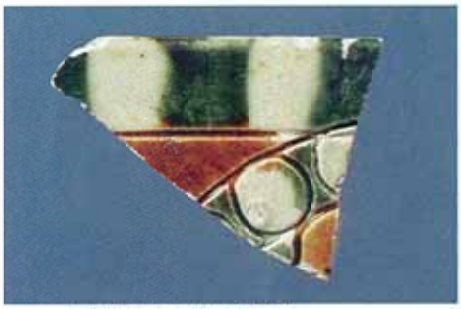


▲推定復元図（岡寺良氏作図）

さて県下では、玄界灘の沖ノ島、古代の迎賓館として知られる鴻臚館跡をはじめ、いくつかの遺跡から陶枕・壺・蓋・盤などが見つかっています。県下で出土例が多く種類も多いのは、大宰府が置かれたことが最大の要因です。このことは、観世音寺・大宰府政庁西側の蔵司地区・大宰府条坊跡と本市内に集中していることからもうかがえます。

今回特に紹介したいのは、観世音寺宝蔵の東側の発掘調査で出土したものです。最近確認された口縁を含めて5点の破片ですが、数が少ない唐三彩であり出土地点も近いことから、資料整理を行った九州歴史資料館の岡寺良氏はこれらが元々一つの容器だったとみて、新たに復元図を提示されました。

それによると、胴が丸く、肩には大小2種類のメダイオンという装飾がほどこされた壺形の容器で、胴周りの最大径は約23センチ。全体的な特徴から三足の獣脚がつく壺形の炉（鍑）と推測されています。こうした形態的な特徴をもつ唐三彩は国内に6例あり、平城京跡出土の1例をのぞくと、すべて寺院跡から出土しています。おそらく香炉などに利用されたものでしょう。



▲陶枕破片（蔵司地区出土）

観世音寺は伎楽などを通じて大宰府の対外機能の一翼を担っていました。この遺物も大宰府・観世音寺の国際性を伝える一品です。（写真：九州歴史資料館提供）

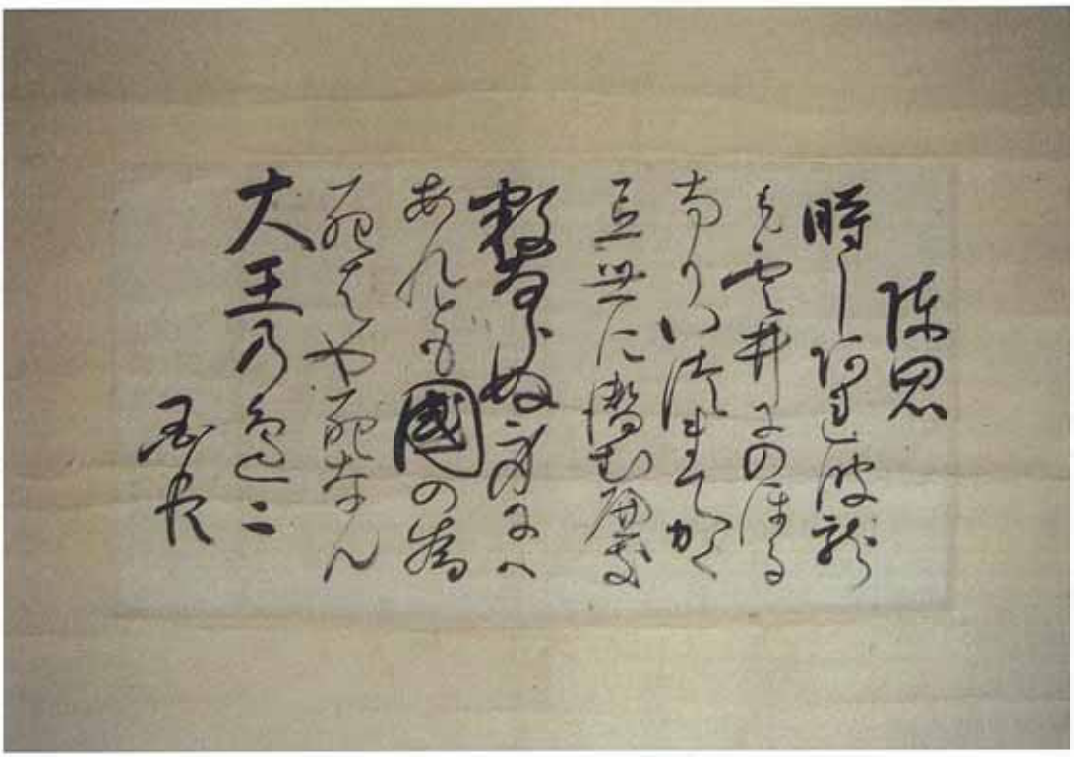
文化財課　井上　信正

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　✉keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

この広報紙は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 303

維新志士たちの書 ―平野國臣(ひらのくにおみ)―



今年は、NHKの大河ドラマ「龍馬伝」が放映され、何度目かの幕末ブームです。幕末から明治にかけては、日本全国が舞台になっており、自分の生まれ育った場所が維新の舞台になっていることに気付いて驚かれる人もいます。

さて、その幕末から明治にかけての激動時代に、皆さんが住んでいるここ太宰府も、維新の舞台になったことをご存じでしょうか。「太宰府の文化財」280号で紹介した松屋にその証拠の一つが残されています。幕末に松屋の主だった栗原孫兵衛は、福岡、長州、薩摩の志士と広く交わり尊皇攘夷運動を支援していました。そのため松屋にはさまざまな人々の出入りがあったと伝えられています。例えば、平野國臣（福岡藩）、月照上人（京都清水寺）、野村望東尼（福岡）、平野五岳（日田専念寺）、西郷隆盛（薩摩藩）、大久保利通（薩摩藩）等です。

今回紹介する維新志士の書は、平野國臣が松屋に残したものです。平野國臣は福岡県出身で、文政11年（1828年）5月12日生れで、元治元年（1864年）8月21日に死去しました。元福岡藩士で、攘夷派志士として奔走し、西郷隆盛ら薩摩藩士と親交を持ち、討幕論を広めました。京都から追われた月照を薩摩まで送り届けるため尽力しましたが、後に、禁門の変の際に生じた火災を口実に殺害されました。彼の歌としては、薩摩藩に潜入した後、藩に倒幕の機運を高めようとしたが、上手く行かず退去させられた際に詠んだ「我胸の 燃ゆる思いにくらぶれば 烟はうすし櫻島山」が有名です。実は國臣は太宰府と縁が深く、18歳の頃、福岡藩の普請方手附（土木営繕）の任命を受けて、台風で壊れた太宰府天満宮の楼門の修理にあたっています。青年期に4カ月程度とはいえ、学問の神菅原道真のお膝元である太宰府で過ごしたことは、後に有職故実の研究者としても著名になる國臣の礎になったことでしょう。以後、國臣は人生の岐路には必ず天満宮に参拝しました。この松屋に残された國臣の書の内容としては、維新を目指すがなかなか上手く行かず、雌伏している自身の有様を込めて表しており、勢いのある筆跡からその人となりが伝わってくるようです。

文化財課　高橋　学

陳思

時しあれば龍
も雲井にのぼる
なり、いつまでかく
て世に潜むべき
数ならぬ身には
あれども國の為
死はや死なん
大王の辺に
國臣

解釈文
陳思（思いを述べる）
時期が来れば龍も天上に
昇るというのに
いつまでこのように
世にかくれているのだろ
うか
とるに足りない自分では
あるが、お国のためには
死んでもかまわない
天皇のそばで
國臣

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

この広報紙は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 304

佐波理（さはり）の匙（さじ）（スプーン）

大宰府条坊跡出土　奈良時代

▲匙の先と持ち手の部分が折れていて、現状では全長7.6cmですが、本来は、匙部分が6～7cm、持ち手部分が18～19cmで、全長24～26cmほどだったと考えられます。

今回紹介するのは、青銅でできた匙です。昨年発掘調査を行った大宰府条坊跡第277次調査（西鉄二日市操車場跡地内）から出土しました。

佐波理とは、青銅（銅と錫（すず）の合金）のうちでも錫が高い割合で含まれるものの呼び名の一つです。九州国立博物館の協力で蛍光X線分析（※）を行った結果、この匙も銅に対し高い割合で錫が含まれることが判明しました。

奈良東大寺の正倉院には、匙を含むたくさんの佐波理製品が伝えられていて、これらの佐波理製品のほとんどは、奈良時代に朝鮮半島の新羅（しらぎ）（統一新羅）から輸入されたものです。7世紀から8世紀ごろ、新羅では佐波理製品が作られていたことが知られています。青銅製品は錫を多く含むと割れやすく、加工が難しくなります。こうした佐波理製品は、当時の新羅の高い技術水準を示す資料でもあります。「佐波理」は韓国語で器を意味する「サバル」が語源と考えられ、当時、「佐波理」とは新羅で作られた青銅製品を意味していたのかもしれません。

この匙を正倉院事務所へ持って行き、正倉院所蔵の佐波理匙と比較検討を行ったところ、出土した匙と正倉院の匙が、そっくり同じ形だと判りました。この匙が新羅で作られたものであることが断定できそうです。

青銅の匙の出土は、日本国内ではわずか10例余りのほか、韓国でも有力者の墓や王宮跡に限られることから、特別な品であったと推測されます。この佐波理の匙が、どのような経緯でここ太宰府に運ばれてきたのか、また、匙が出土した場所にどういった意味があるのか、一体誰が、どう使っていたのかなど、さまざまな関心が湧いてきます。

匙が出土した大宰府条坊跡第277次調査地点は、大宰府政庁の南約1㎞、古代の都市区画である大宰府条坊のほぼ中央にあり、条坊のメインストリートである朱雀大路の東側に面したところに位置します。当時、日本へは新羅からの使節が度々往来し、大宰府にも訪れていました。朱雀大路は外国の使節が大宰府政庁へ向かう際に必ず通る道ですから、ここで新羅の人々とのやりとりがあったことも考えられますし、ひょっとすると、この佐波理の匙を使って食事をしていたのかもしれません。現在も発掘調査は継続中で、周辺の調査成果と併せて現在検討中ですので、今後の報告を楽しみにお待ちください。

文化財課　遠藤（えんどう）　茜（あかね）

※X線照射により物質の元素組成を同定する分析方法

▲大宰府条坊跡第277次調査地点

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp

この広報紙は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 305

新指定された文化財

6月22日に行われた太宰府市文化財専門委員会の答申を受けて、9月9日付けで、7件が新たに太宰府市指定文化財に指定されました。太宰府市指定文化財は、これで合計17件となります。

有形文化財（6件）

■宮ノ本丘陵古代墓地出土品

所在地：太宰府市文化ふれあい館

▲買地券出土時の様子とX線撮影画像

宮ノ本丘陵（向佐野）で調査された古代大宰府の役人墓地（85基）から出土した遺物。鏡や坏などの数多くの埋納品が出土したが、その中でも買地券は現在全国で2例しかなく、学術的価値は極めて高い。

■神ノ前窯跡出土瓦附2号窯出土土器

所在地：太宰府市文化ふれあい館

神ノ前遺跡（吉松）の登窯から出土した瓦は、西暦600年前後に製作されたとみられる日本最古級のもので、軒丸瓦、丸瓦、平瓦など約68点が出土している。

■正平八年銘法華曼荼羅板碑

所在地：大字太宰府

四王寺山の中腹にある水瓶山に所在する。正平8年（1353年）の銘と法華曼荼羅の梵字を刻む。市内最古の板碑。高さ1.55m。

■正平廿三年銘梵字板碑

所在地：三条一丁目

快嘉律師の墓といわれている板碑で、正平23年（1368年）の銘文と大日如来の梵字を刻む。市内で2番目に古い板碑。高さ1.36m。

■文明拾八年銘梵字板碑

所在地：五条二丁目

五条構口跡にある庚申塔と並んでいる。文明18年（1486年）の銘文と梵字を刻む。市内で3番目に古い板碑。高さ1.06m。

■獣帯鏡

所在地：太宰府市文化ふれあい館

向佐野の宮ノ本遺跡12号墳から出土したもので、およそ2世紀前半頃の製作とみられる中国製の鏡。全国的にも出土例は少ない。直径12.9cm。

史跡（1件）

■般若寺跡

所在地：朱雀二丁目

般若寺は、古代大宰府条坊内に存在した重要な寺院で、塔跡と径73cmの円形ホゾ穴が彫り込まれた塔の礎石が残されている。

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　✉keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報紙は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 306

天台宗の六所宝塔 祈りの山宝満山

大字内山 ～平安時代～

天台宗は最澄が中国にあった唐の天台山で学び、延暦25年（806年）に帰朝して比叡山延暦寺を拠点にして開いた仏教の宗派で、法華経を根本の教えとして密教を取り入れた、平安時代では最新の宗教の一つでした。最澄は生前に仏教によって国を守る「鎮護国家」を企画し、その証として全国6カ所に法華経を安置してそれを唱えるための宝塔の造立を企画します。その6カ所とは弘仁9年（818年）の『六所宝塔造願文』という記録には、安東、安南、安西、安北、安中、安総の名が見え、安中の塔は比叡山の西塔、安総の塔は比叡山東塔とされ、安南は現在の大分県の宇佐、安西は「筑前宝塔院」と記載されています。『石清水八幡宮文書之二』所収の「大宰府牒」承平7年（937年）記事には筑前竈門山に六所宝塔の一つ（安西塔）があるとされています。竈門山は現在の宝満山であり、記事には「竈門山分塔、沙弥証覚在俗之日、以去承平三年造立已成。上安千部経、下修三昧法、宛如大師本願」とあり、このことから筑前竈門山の宝塔は法華経の保管と三昧法（経を誦え仏を拝むといった修行法）の実施が求められた施設であり、承平3年（933年）にはすでに建立されており、その構造は2層式の塔であったことが知られます。

宝満山の大字内山側から通称一の鳥居に至る林道の脇に、昭和50年代まであった「妙見」さんの祠の跡があります。ここには太宰府天満宮文化研究所の所員により昭和56年（1981年）に礎石建物が発見されていた遺跡があります。ここから瓦も出土したことから、天台宗の建てた六所宝塔の推定地に挙げられていました。平成20年度に行った発掘調査で、建物の柱間が2.52m＋3.1m＋2.52m（8.3＋10.2＋8.3尺）の一辺8.14m（26.8尺）の、柱配置からいわゆる三軒堂（間面記法でいう一間四面堂）の形式に復原される礎石建物が改めて確認されました。建物は地形を巧みに利用した高さ3mの基壇を伴う瓦を使用した建物で、その創建は10世紀半ば以降であり、金銅仏が出土したことにより仏教関連施設であることも明確となりました。この時、同時に行った宝満山における悉皆的な一連の調査によって、山中において古代の瓦と礎石を伴う遺構の存在が下宮地区（竈門神社境内地周辺）とこの場所に限定されることが鮮明となり、この遺構が六所宝塔のうちの安西塔であった可能性は高まっています。

【六所宝塔の所在地】

※安南塔は宇佐で建てられたものが後に筥崎で再建されました。

平成21年10月にはこの調査された一角に凝灰岩で造られた石塔が建立されました。この石塔はここが最澄の国家を思う願いによって建てられた宝塔があった場所として、天台宗開宗1千200年の記念ということで、天台宗が大分県宇佐八幡宮境内の石塔とともに設置したものだそうです。人々の祈りの思いが時を越えてつながったモニュメントであり、宝満山の新たな名所となっています。（遺跡には解説板が設置されていますが、個人の土地であり見学についてはご配慮をお願いします）

文化財課　山村　信榮

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報紙は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 307

かつてあった村 ～佐野浦～

大佐野の南西にある大佐野貯水池、その奥にかつて小さな集落があったことをご存知でしょうか。大字大佐野字佐野浦。今は大佐野貯水池の東を通る林道大佐野線に沿う木々生い茂る空間になってしまっています。そこには、第2次世界大戦前後まで数軒の家が集まり佐野浦集落が営まれていました。そのことを物語るように林道の東側に、家々の区画であった石垣が残されています。またこの林道がかつて筑紫野市山口へ抜ける道であったことを知らせるように、「猨田彦大神」碑がひっそりと残されています。

▲明治14年と判読できます。

記された銘から「明治14年（1881年）」に建てられたことが読み取れます。猨（猿）田彦大神は、道案内をなさる神様として知られています。太宰府天満宮の秋の神幸式大祭の折、赤い鼻高のお面が行列の先導役として掲げられますが、そのお面が猨（猿）田彦大神です。このことを考えると、佐野浦にある「猨田彦大神」碑は、この碑に沿うようにある旧道を、多くの人々が通ったことを物語るモノとして考えることができます。注意してみると、碑銘である「猿」と「猨」が異なっています。佐野浦にある「猨田彦大神」碑のような「猨」の字を用いる例は極めて珍しく、貴重な碑ということになります。一般に「猿」に対し、「猨」は大きな猿・手なが猿を意味しており、「大きい」意味を込められて記されたのではないかと考えられます。

今もかつてあった村を守るかのように、木々生い茂る中にひっそりと建つ「猨田彦大神」。この碑を見ると、この地を多くの人々が往来していた頃が想像されます。

（調査：文化遺産調査ボランティア【太宰府西小班】 文責：中島恒次郎）

※随時、昨年から開始した活動の中で、多くの成果を上げている文化遺産調査ボランティアの皆さんの調査成果を紹介していきます。

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198 太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121 FAX(921)1601 keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報紙は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 308

蔵司

大宰府政庁跡の西側の丘陵は、「蔵司」と呼ばれ、小字名が残っています。

蔵司とは、蔵（倉庫）を管理した大宰府の官司の一つです。古代の税（租庸調）のうち、「調」（地方特産物などを納める）や「庸」（年10日の労役もしくは米・布を納める）は、一般には京に運ばれ朝廷の財源となりましたが、西海道（九州の九国三島）は大宰府に納められ大宰府の財源となりました。ただ、一部は大宰府から京に貢進されます。その中でも特に重んじられたのが「綿」（絹の真綿※）です。（※繭を綿状にしたもののことで木綿の綿ではありません）大宰府の綿は、奈良時代には外国との交易品としても利用される、高品質・高級品として知られていました。観世音寺造営に当たった沙弥満誓の「しらぬひの　筑紫の綿は　身につけて　いまだは　着ねど暖かに見ゆ」（万葉集　巻三－三三六）と詠んだ和歌は、まさにそれを物語っています。こうした綿をはじめとする西海道からの貢納品が、大宰府の倉庫（いわゆる「府庫」）に納められており、それは蔵司丘陵にあったと考えられています。

ここを蔵司と呼んだことは、古くは江戸時代の史料に見え、黒田藩も文政3年（1820年）に都府楼跡一帯の現況調査を行い、蔵司丘陵に133個の礎石があったことを記しています（「文政三庚辰年三月　観世音寺村之内旧跡礎現改之図」福岡市博物館所蔵）。ただ、いつの頃か礎石は埋もれ、また失われてしまったようです。

昭和8年（1933年）、別荘建設に伴う庭園整備の際、円座をもつ23個の礎石が見つかりました。それが今見る礎石群です。その時調査を行った九州大学の鏡山猛教授は、現存する奈良時代の倉庫で有名な東大寺正倉院との比較から、ここが「府庫」だと推察しています。

近年、丘陵一帯の公有化が進み、昨年度から九州歴史資料館が現地調査に入っています。今はまだ本格的な調査ではなく、丘陵が現在に至った経緯や、遺跡分布についての調査を進めていますが、古い水路跡や、礎石を据えた跡などが確認されています。また甲冑（よろい）の一部・鉄鏃（やじり）、鉄剣など見つかっており、特に鉄鏃が多いことなど、一時期相当量の武器・武具が集積されていたことも判ってきました。

「蔵司」に結びつくものが今後出てくるかどうか、調査の行方が注目されます。

（今月は、文化ふれあい館・大宰府展示館で蔵司出土品の展示を行っています）

文化財課　井上　信正

▲北西上空（右側の丘が蔵司と呼ばれています）

▲礎石

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報紙は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 309

維新志士たちの書 ―月照（げつしょう）―

太宰府の文化財303号で平野國臣の書を紹介しましたが、今回は、同じく宰府松屋が所蔵している維新志士の一人、僧月照の書を紹介します。

月照は、文化10年（1813年）に、香川県善通寺市吉原町（旧吉原村本所）で生まれました。10歳で遍照院牛額寺の住職蔵海（ぞうかい）（叔父）の法弟となります。後に蔵海が京都清水寺の住職となったので、蔵海に同行し京都に入りました。その後高野山で学んだ月照は、蔵海の後を継いで22歳で京都成就院清水寺の住職となりました。当時の京都は幕府と倒幕派が鎬（しのぎ）を削る争いの舞台でした。月照は尊皇攘夷活動に傾倒していき、京都の公家と親密になったことで幕府に要注意人物として、目を付けられるようになりました。また、西郷隆盛と親交が篤く、西郷が敬愛した島津斉彬が急死した際に、殉死しようとした西郷を説得したエピソードがあります。

安政5年（1858年）8月から始まった安政の大獄の際に、幕府から尊皇攘夷派の危険人物と目されて西郷と共に京都を追われています。京都から薩摩藩に下っていく際に、太宰府の松屋に匿われたことは、太宰府の文化財280号で紹介したとおりです。その後、苦労をして薩摩にたどり着いた月照は、体制が変わった薩摩藩から疎まれてしまいます。薩摩藩から追放という名の処刑をされることになった月照は、その前に西郷と共に自ら錦江湾で入水して46年間の生涯を閉じました（西郷のみ奇跡的に蘇生）。この時、筑前から薩摩まで月照に随行し護衛していたのが、前に紹介した平野國臣その人でした。

松屋に残されているこの書は、内容からして松屋の主人栗原孫兵衛に宛てた匿われたときのお礼の書だと考えられます。現在、松屋の中庭には、この月照の書が歌碑として建立され、随時見学することができます。

文化財課　髙橋　学

月照
ことの葉の
花を
あるしに
旅ねする
この松かけは
千よも
わすれし

月照
感謝の念をこめた歌を
主（栗原孫兵衛）に
送りたい
泊めていただいた
松屋への恩は
ずっと忘れることは
ないだろう

▲月照上人肖像画

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報紙は再生紙を利用しています。

太宰府の文化財 310

水城大堤之碑

国分二丁目

福岡日田線（県道112号線）を大野城市方面に向かっている途中、国の特別史跡・水城跡の東門付近で、右手に高さ3mを超える石碑が見えます。碑面には、大きく「水城大堤之碑」と彫り込まれています。碑に向かって右側の面には、「大正四年乙卯十一月爲大典記念建之」、また、「水城村水城青年會」とあり、この碑が大正4年（1915年）の大正天皇の大典を記念して、水城村の青年会によって建てられたものだと分かります。

大正天皇は、大正4年11月に京都で即位式を行いました。これに前後して、全国各地で天皇の大典を記念した事業が行われます。水城青年会でも大典を記念して、この水城大堤之碑を建てることにしたのです。

碑の建立はすべて青年会と関係者によるものです。碑の台石は宝満山から、碑文が刻まれている掉石は博多から、どちらも当時の青年会の面々が休日を返上して運んできたほか、石の加工等も自分たちで行ったといいます。

碑の背面には、『日本書紀』や『続日本紀』による水城の歴史と、測量成果が記されています。測量は、水城村出身の土木技手・竹森善太郎が十数日かけて行い、碑文は、上水城（国分村）の郷土史家で軍医の武谷水城が選書したものです。このように、水城村の青年会を中心に地元の若い力を結集して建てられた碑なのです。

ところで、この石碑が建てられる以前にも、水城跡を顕彰する表示が建てられていたことが記録されています。明治22年（1889年）、福岡元寇記念碑建設事務所によって水城東門付近の国道沿いに、「憂國の士は少時車を駐むべし」との木標が建てられました。やがてその木標が腐朽してしまうと、水城村の有志によって再び木標が建てられますが、それもまた腐朽してしまいます。そして、この石碑が建てられ、今に至ります。

村の名の起こりでもある水城跡に対して、地元の人々が如何に誇りを持っていたかを、この碑と碑を取り巻く物語が伝えています。現代においても、地元の皆さんによって、この水城大堤之碑をはじめ地域の歴史（物語）を後世に伝える活動が始まっています。

春になると、水城東門付近には一面の菜の花畑が広がります。ぜひ、菜の花畑と併せてこの石碑にも立ち寄り、約1世紀前の人々の思いに触れてみてはいかがでしょうか。

文化財課　遠藤　茜

碑背面の拓本

この拓本は、「拓友会」の皆さんによるものです。（文化ふれあい館蔵）　出典『拓本でたどる保存の心』太宰府市文化ふれあい館2006年

拓友会は平成8年の文化ふれあい館開館の際に開講した拓本講座の修了生たちにより、風化していく石碑を採拓して資料として後世へ伝えていく目的で平成10年に結成され、現在も活動を続けています。

編集／太宰府市総務部経営企画課：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号
☎092(921)2121　FAX(921)1601　keiei-kikaku@city.dazaifu.lg.jp
この広報紙は再生紙を利用しています。